

[ブーケ]

bouquet

[ブーケ]

bouquet





特別企画 / Interview

藤原道山

伝統の継承と革新に挑戦し続ける
尺八演奏家が語る

伝統音楽を多くの人に伝える活動を
積極的に行うとともに、

国内外問わず著名なアーティストや
オーケストラなどとの共演を重ね、

尺八の可能性を追究し続ける藤原道山さん。

近年では、学校公演などにも
精力的に取り組まれています。

道山さんが、デビュー25周年を迎える節目の年に、
これまでの活動を振り返りながら、
音楽との向き合い方や教育に対する思いなどを
さまざまに語ってくださいました。

Dozan Fujiwara

出会いの軌跡

bouquet [ブーケ] 編集部 (以下、b)：この度はデビュー25周年、おめでとうございます。これまでの演奏活動を振り返って特に印象的だったことはありますか？

藤原道山：オーケストラとの共演は思い出深いですね。学生のときからコンチェルトに憧れてオケのメンバーを集めてやっていました。今では毎年公演の機会をいただき、昨年も読売日本交響楽団と『ノヴェンバー・ステップス』（武満徹 作曲）を演奏するなど、自分の中のライフワークの一つになっていて、今年の11月に公演を予定しています。

b：道山さんの公演はいつもすばらしいパフォーマンスですが、維持するために心がけていることなどはありますか？

道山：何事もおもしろがることですかね。共演というところで言うと、この人はこの楽器に、この音楽にどんなおもしろさを感じているのかを考え、僕も同じように楽しみたいと思うようにする、というのが第一歩のような気がするんですね。相手に対する尊敬の念を常に忘れないようにしていると、そこから何か広がっていくような、そんな感じがします。

b：ジャンルを超えたさまざまな楽器との共演に挑戦される中で、活動の軸になっているものは何ですか？

道山：「出会い」だと思います。多くの人との「出会い」によって新しい考え方や自分にはないものを得て、そこから新しい音が生まれていく、世界が広がっていくということを常に実感しています。例えば、坂本龍一さんと富田勲さんとの共演は私にとってすごく大きかったですし、幼い頃から憧れていた人と一緒に音楽をつくることができるという経験もまた、尺八を通して得たこれまでの「出会い」があったからこそだとつくづく感じます。

b：そうした「出会い」をテーマとした記念アルバムをつくれるそうですね。

道山：はい、「選 Kai」というピアノとのデュオのアルバムをリリースします。この「選」という字は「出会う」ことを意味し、出会いからまた新しいサウンドが生まれてくるという思いを込めて名付けました。今回のオリジナル作品は、ピアニストだけではなくヴァイオリニストやチェリスト、大学の同期生など、これまでセッションしてきたいろいろなアーティストに「藤原道山に吹かせたい曲」ということで、それぞれの持ち味を生かして書いていただきました。あとはカバー作品も収録します。選曲はなかなか難航しましたが、昭和から始まって時代ごとに僕が聴いてきた音楽から名曲を選ばせてもらいました。

b：ピアノとのデュオという編成を選ばれたのはなぜですか？

道山：これまでのコンサートでもピアノとの共演はよく

やっていたのですが、20周年のときに「雙-SO-」というアルバムをつくった頃からピアノとのデュオに力を入れて、自分のレパートリーをもう少し増やしたいとずっと思っていたんです。ピアノ1台あればいろいろな音楽がつかれるし、シンプルに尺八の魅力を伝えるにはこの最小編成がよいかなと。幅広いジャンルの作曲家にお願いしたもの、それによって尺八のいろいろな世界が広がってほしいというところと、もっと身近に音楽として楽しんでもらえる作品が増えればいいなと思ってのことです。

b: そうなんですね。手応えとして、思い描いていたようなサウンドになっていますか？

道山: 録音はこれからなんです。美幌^{びほろ}という北海道の道東にある街でレコーディングを予定しています。ちょうど昨年从那の観光物産大使になり、スタインウェイのいいフルコンのピアノもあるということだったので、せっかくだからと。

b: それも貴重ですね。アルバムを楽しみに待ちたいと思います。

教え、育てる挑戦

b: 道山さんが取り組まれている「音結 (OMUSUBI) Project」や学校公演などご紹介したいのですが、始められた経緯からお話いただけますか？

道山: 鹿児島県の霧島に移住した僕の妹からの誘いがきっかけで、その地域の小学校に演奏とワークショップという形で無償の学校公演を行ったというのが最初です。これがけっこう反響をいただいて、子どもたちもまた吹きたいと言ってくれたので、せっかくだからと楽器をプレゼントしたんです。そのときに、学校の授業を通して尺八に親しんでくれる人が増えたらすごくいいなって思ったんですよ。音楽に限らず今は世の中に情報や選択肢が多すぎて、なかなかこちらに目を向けてもらうのは難しいと感じていたもので、子どもたちの純粋な気持ちや興味をもってくれる姿に触れて、自分がこういう活動に時間を割けるようになったら、もっと子どもたちが育ってくれるんじゃないかなと。美幌町で学校公演を行った際も同様の感触を得て、これはもうしっかりプロジェクトとして形にしていこうとスタッフとも話して、コンサートの収益金を活用して学校公演や尺八のプレゼントを行う「音結 (OMUSUBI) Project」が始まりました。

b: 小学生が対象の学校公演だと、選曲はどのようにされていますか？

道山: そうですね、分かりやすさを重視して迎合するようなプログラムというよりも、こちらの持っているレパートリーをしっかり聴いてもらうようにしていますね。たまに、分かりやすいってなんだろうと思うときがあるんです。分かりやすいと感じているのは実は大人だけで、子どもはあんまりそういうことを考えずに、おもしろいものはおもしろ



取材は2025年1月6日、教育芸術社にて行われた

ろいと感じてくれるような気がするんですよね。やっぱりその柔軟性、今まで知らない音に出会う楽しさが絶対にあると思っています。

b: 子どもの感性を信じていらっしゃるんですね。

道山: そうですね。だから自分がおもしろいと思うことを一生懸命伝えようという気持ちで毎回臨んでいます。僕は学校公演のほうが自分のコンサートよりも緊張するんですよ。自分のコンサートというのは聴きたい人が来てくれる、でも学校の子どもたちってそうではない。こちらに振り向いてもらうところから始めないといけないという怖さがあります。子どもたちにいかにおもしろさを伝えられるかを常々考えますね。だから、音楽室や体育館でも舞台を使わずできるだけ近い距離で、子どもたちと同じ目線でみんなの顔を見ながらやっていくスタイルにこだわっています。やっぱりそれ子どもたちとの出会いだし、子どもたちにとっても、僕とそして尺八に出会う瞬間になると思うので。あとは、つかみも大事にしています。例えば、教科書や音楽室に宮城道雄の顔写真があれば「この人ね、僕のおばあちゃんの先生なんだよ」と言う子どもたちの食いつきがよいですね(笑)。僕自身も教科書に載っていますが、教科書に出ている人に出えることってあまりないじゃないですか。僕としては、それも一つ大事な活動じゃないかなと思っているんですよね。

b: 学校公演では今後どのような展開を思い描いていますか？

道山: 学校公演の難しいところは、どうしても「やって終わり」になってしまうことです。そのときはすごく盛り上がるんですが、また日々のいろいろなことに紛れて消えていってしまう。そうならないように、例えばその地域にいる音楽家たちとも交流して、そのかたがたが学校へ教えに行くような体制を取ればよいなと考えています。

多くの人との「出会い」によって、
新しい考え方や自分にはないものを得て、
そこから新しい音が生まれていく、
世界が広がっていくということを
常に実感しています。

b: 学校現場や先生がたとのつながりも大事になってきますね。

道山: はい。活動の最初のうちは点ですが、それがつながって、線になって面になって立体にしていければと思っています。今、東京藝術大学の音楽学部准教授という立場にもなりまして、教えるだけでなく、指導者を育てるということも今後はもっと大切にしていかなければいけないと感じています。やっぱりいい指導者がいないと残っていきませんよね。ただ知識を与えるような指導ではなく、教える人もいろいろな音や音楽にどんどん触れて、自分が本当によい、おもしろいと思えるものを伝えていけるようになってほしいですね。

音との出会いから言葉を引き出す

b: 教育芸術社のもう一つの広報誌『Vent (音楽教育ヴァン)』では毎号エッセイをお願いしています。独特な語り口でさまざまな内容を展開してくださっていますが、執筆に対する思いなどお聞かせいただけますか？

道山: だいたいいつも「邦楽のこと」「コラボレートのこと」「日本音楽の豆知識的なこと」の3本立てで書いていますが、長く続けているとだんだんネタが…… (笑)。これも出会いにつながってくるのですが、すばらしいアーティストや先生がたとの共演を通してたくさんのインスピレーションを受けたり、新しい企画を始めたたり、そういう日々のつながりや、音と音との出会いを言葉にして表せたら、

またちょっと違った方向性が見えてくるおもしろさがあるかなと思いつながら毎回書かせていただいています。

b: 書くときの大変さや意識されていることはありますか？



このときご持参いただいたのは
25年以上、道山さんとともに音楽を紡いできた尺八

道山：題材にはすごく悩みますが、決まると割と早いですね。ほぼ毎回1日で書いています。主に音楽の先生が読んでくださる誌面なので、ある程度は専門的になっても大丈夫だとは思っていますが、どういう切り口でいこうかとか、どこまで話そうかと、内容をどこまで掘り下げていくかはいろいろ考えますね。

b：最後に子どもたちや先生がたにメッセージをお願いします。

道山：コンサートに来てくれる子どもたちがサインくださってときどき教科書を持ってきてくれるんですよ（笑）。教科書にサインするのは新鮮だなと思いつつ、興味をもってくれていることが僕にとってはすごくうれしいですね。何事も同じだと思いますが、一度興味をもったことって、知れば知るほどどんどんおもしろくなっていくから、いろいろな体験をしてそれをさらに深めていってほしいなと思いますね。

b：そのためには道山さんの生の音に触れてもらうのがいちばんの近道ではないかと思います。

道山：ありがとうございます。先生がたには、おもしろがる

ことに対する制限をあまりかけないでほしいということをお伝えたいですね。まずは思いっきり楽しんで、何を楽しんでいるのかを子どもたちの言葉から引き出していく姿勢が大事だと思います。ただ、最終的には言葉にできないところが音楽のよさでもあるので、その部分をいかに捉えて認めてあげるかを考えていただきたいですね。またそこで子どもたちが興味を示したときに、さらにもう一步深めていくような声掛けができると、言葉がより生きてくるということか……。

b：そういうところでも道山さんが学校現場に赴く重要性を感じます。

道山：例えば、曲に出てくる「ド（Do）」の音に対して、最初はどの「ド」も同じように演奏してしまうんだけど、同じ音でも、この旋律の流れからきたときのこの「ド」と別の流れからきたときの「ド」では、全然意味が違ってくる。我々演奏家はただ音高としてではなく、いろいろな表現を考えていかにその1音を聴かせていくかということにすごく注力しているので、1音の中にいろいろな要素が含まれていることを知ってもらいたいですし、それが深めるということなのかなと思います。教え方についてはこれからさまざまな実践を試みていきたいですね。



藤原道山（ふじわら・どうざん） 尺八演奏家

10歳より尺八を始め、初代山本邦山（人間国宝）に師事。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業、同大学院音楽研究科修了。在学中、皇居内桃華楽堂において御前演奏。平成30年度文化庁芸術祭優秀賞（アルバム「季（TOKI）～冬～」）、令和2年度（第71回）芸術選奨 文部科学大臣賞、第5回服部真二音楽賞、他受賞。これまでにCD、映像作品等多数リリース。伝統音楽の演奏活動及び研究を行うと共に、「KOBUDO -古武道-」や尺八アンサンブル「風雅竹韻」等のユニット活動、様々なジャンルのミュージシャンとの共演を積極的に行う。ONE PIECE × 人形浄瑠璃 清和文楽『超馴鹿船出冬桜』総合演出・音楽監修、『マクベス』『ハムレット』『山月記・名人伝』（野村萬斎演出）などの舞台音楽、吉永小百合氏の朗読アルバム『第二楽章 福島への思い』の音楽監修も手がける。

現在、公益財団法人都山流尺八楽会所属・竹琳軒大師範。都山流道山会主宰。日本三曲協会会員。東京藝術大学音楽学部准教授。美幌観光物産大使（北海道）。

藤原道山オフィシャルホームページ <https://dozan.jp/>



Information

CD

尺八演奏家 藤原道山 CDデビュー25周年記念アルバム「選 Kai」

2025年3月29日 発売予定

発売元：株式会社DO

藤原道山へ贈られた新曲、ピアノデュオでの新録曲、藤原道山の記憶に残る名曲、合計25曲を収録

公演

藤原道山 25th Anniversary Concert「選」

3月29日（土）佐賀県立美術館ホール（佐賀）

3月30日（日）北九州市立戸畑市民会館（福岡）

5月10日（土）札幌コンサートホールKitara 小ホール（北海道）

5月18日（日）電気文化会館（愛知）

6月21日（土）浜離宮朝日ホール（東京）

10月19日（日）あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール（大阪）

日本めぐり

本連載では、日本各地で文化や芸術を支えている方々取材します。

第11回は、石川県白山市にある株式会社浅野太鼓楽器店を訪ね、代表取締役社長の浅野恭央さんにお話を伺いました。

第11回 石川県白山市

浅野恭央

株式会社浅野太鼓楽器店

浅野太鼓楽器店は、創業400年の歴史を誇る和太鼓メーカーです。一般的な和太鼓に加え、雅楽や祭礼、神社・仏閣で用いる多種多様な楽器を扱うとともに、太鼓の胴抜きから革張りまでの工程を自社で一貫して行う国内有数の老舗企業です。

創業400年の伝統を誇る匠の技

— 御社における和太鼓作りの歴史について教えてください。

浅野…江戸時代初期の1609年、加賀藩前田家の招請を受け兵庫県赤穂から北陸に移った太鼓士が、加賀で和太鼓作りを始めたことがきっかけです。現在は和太鼓を専門に取り扱っておりますが、過去には太鼓の打面に用いる牛の革を使って、戦で使う革具や馬の鞍、戦後間もない頃には革靴なども作っていたと聞いています。

— 和太鼓は大きく分けて、**紙で留めた太鼓とロープで締めた太鼓の2種類**があると伺いました。その中で、**大太鼓や長胴太鼓など、学校現場で使われることの多い前者の製作工程**についてお聞きます。

浅野…長胴太鼓は、原木を幹の太さと同じ長さになるよう「玉

切り（輪切り）」にし、その木から取れる最大の大きさに削っていきます。その後、ある程度の厚みをもった「荒胴」と呼ばれる状態になったところで、3〜5年かけて乾燥させます。

— 乾燥の期間がとても長いですね。

浅野…急激に乾燥させると木が割れるおそれがあるので、じっくり時間をかけて乾燥させます。基本的には自然乾燥ですが、木によつては煙で燻したり、真空乾燥させたりもします。木が水分を含んでいると太鼓になったときにいい音が出ませんので、しっかりと乾燥させる必要があります。

— 木材の内部をくり抜く「胴抜き」の作業は、どのように行っているのでしょうか？

浅野…昔はずっと手作業でやっていたのですが、今は全部機械でくり抜きます。削るだけなら1日あれば終わりますが、そこから乾燥させてまた削つてと細かな作業が続くので、次の工程に進むまでにはそれなりの時間がかかります。胴が出来上がると次は「革張り」です。音の高低は張り具合で調整できますが、音の良し悪しは革の厚さが影響します。高い音を出すのであれば厚い革、余韻を出すのであれば少し薄い革を使うなど、都度お客様と相談しながら革選びも行います。

— そして、最後に「紙留め」の工程を経て完成となるわけで



浅野恭央（あさの・やすお）

株式会社浅野太鼓楽器店18代目、2000年に代表取締役社長に就任。2015年「調律桶太鼓（奏）」を開発。グッドデザイン賞BEST100、グッドデザイン特別賞ものづくりデザイン賞を受賞。



胴抜き後、「亀甲彫り」や「波動彫り」と呼ばれる彫刻を施すことによって、太鼓の残響をよくする効果がある



専用の機械で行われる「胴抜き」の作業

すね。一連の作業は一人で行うのですか？

浅野…分業制でやっています。作業は大きく分けて、「胴づくり」「塗装」「革張り」の3つに分かれ、その中で私は革張りの作業を担当しています。和太鼓を製造するメーカーは国内に数多く存在しますが、胴づくりから革張りまで一貫して行っている会社は、おそらく全国に5件もないのではないかと思います。

―経年劣化した和太鼓の修繕もされると伺いました。

浅野…胴は管理を怠らなければ100〜200年は平気でもありますが、革は叩かなくても劣化していきますので修繕が必要になります。ご要望としては、やはり革のメンテナンスが多いです。大体の場合は張り替えになりますが、「締め直し」といって既存の革を使って音を高くつくり直すこともできます。色がくすんだり傷ついたりした胴の磨き直しをすることもあります。

「いい音」をつくるための新たな挑戦

―和太鼓作りにおいて大切なことは何でしょうか？

浅野…和太鼓はやはり音が命です。人によって「いい音」の感じ方は異なりますので、「いい音の太鼓を作ってほしい」とご依頼されるのが実はいちばん難しい。ですので、相手の求める音をよく理解すること、またお客様の演奏を拝見することなどを通して、ご依頼主が納得する音づくりにこだわっていきたいと思っています。また、私は先代から受け継いだものをそのまま次の世代に渡すのではなく、時代に沿った新しい技術や素材を少しずつ取り入れることを行っています。基本的な和太鼓の素材を変えることはできませんが、例えば、音をよりよくするために胴の膨らみや厚みなどの形状を変化させたり、従来とは違った革の張り方や塗装を試行錯誤したりしています。私の代になってからは、「新たな音をつくる楽器」の開発にも力を入れるようになりました。

―具体的にどのような楽器でしょうか？

浅野…これまでの楽器ではできなかった音程や音色の調律を可能

にし、高い音や低い音など演奏者の望む音が出せる太鼓です。あとはデザインや色など「和」を崩さない程度にこだわりますが、プロの和太鼓奏者と共同で開発したりもしています。

和太鼓作りの未来を見据えて

―御社が2003年から行っている「夢の木植林計画」について教えてください。

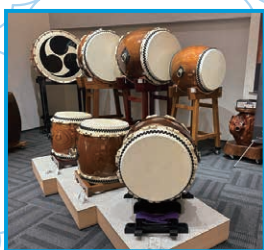
浅野…和太鼓の原料となる樺（けやき）の木はいずれなくなります。次の世代のために少しでも樺の木を残せたらと思い始めたのが「夢の木植林計画」です。植林は能登半島穴水町の山林で行っているのですが、残念なことに先般の能登半島地震によって被害を受けた樹木も多くあります。こればかりはどうしようもないので見守るしかありませんが、生き残った木は5mぐらいの高さまで成長しています。こうした木が力強く育ってくれることを願っています。

―植林した樺が木材として使えるようになるまで、どのぐらいの年月がかかるのでしょうか？

浅野…最低でも200年は育てたいと思っています。革は人々が牛肉を食べ続ける限り手に入ると思いますが、木材はいずれ失われるリスクを抱えています。ですので、今のうちにこうした植林の事業を進めていくことが重要だと考えています。

―最後に、これから和太鼓を学習する子どもたちに向けてメッセージをお願いします。

浅野…全国で開催されている和太鼓のコンテストに出演してみたり、自分たちでオリジナルの曲をつくって演奏してみたりと、型にとらわれず、さまざまなことにチャレンジしてほしいと思います。舞台で演奏する太鼓は古くからあるようで、実はまだ50年ぐらいの歴史しかありません。新しい分野の楽器だと思って、さまざまな演奏活動や新たな曲づくりに励んでもらえたらうれしいです。



完成した和太鼓。ショールームにはさまざまな太鼓が並び



その状態のまま革面を槌で叩いて張り加減を調整する



革の縁を胴の側面に沿ってロープで締め上げながら、時間をかけて革を伸ばす「革張り」



経年劣化した和太鼓の胴に、漆を塗って艶を出す作業

A Finder's Memory

1 枚目

時がとける

／ フォトエッセイ 〉

写真・文：川しま ゆうこ

Photo・Text：Yuko Kawashima

中学生の頃に合唱で歌った『^{*}汽車にのって アイルランドのような田舎へゆこう』というフレーズが心に残り、いつか行きたいと思っていた。写真家となり念願のアイルランドへ。^{*}「日が照りながら 雨のふる」まさにそんな気候の国。写真はアイルランド西部クレア州にある、高さ200mの断崖絶壁が8kmにわたって連なるモハーの断崖を歩いた時のもの。

この日は運よく晴れ。どこまでも広がる空と大西洋、ヒースの草原を吹き抜ける風、鳥のさえずり、のんびり草をはむ牛、あまりにも爽快で時間を忘れていたが、陽が沈みゆくのに気づき我にかえる。夏の日は22時頃。帰りは崖沿いを駆け抜けドウーリンのバブへ駆けこむ。地元の人たちが奏でるアイリッシュ音楽に包まれながら、美味しいビールと魚料理を頬張る。楽園のような場所。

『^{*}汽車にのって』(作詞：丸山薫／作曲：川口晃)より引用



川しま ゆうこ

フォトグラファー。千葉県生まれ。大学在学中に写真を撮り始める。

第17回写真『ひとつぼ展』入選。撮影スタジオ勤務、ロケアシスタントを経て、2005年からフォトグラファーとして活動。雑誌・書籍・広告・webなどの媒体で、人・暮らし・料理・旅・風景・アイテムの撮影を手がける。

(HP) <https://kawashimayuko.com> (instagram) [kawashimayuko_peeco](#)



カトカトーンで駅メロをつくろう 井原市立高屋中学校 × 井原鉄道

= 特別レポート =



カトカトーンはWebブラウザを使用して簡単に音楽制作ができる、
当社開発による新たな音楽Webアプリケーションです。
つくった作品は専用の拡張子 (ktk) のほか、音 (mp3) や簡単な楽譜 (pdf) で書き出すことができます。
今回の特別レポートでは、このカトカトーンを活用し、
鉄道会社協力のもとに行われたある授業事例をご紹介します。



2024年12月24日に参観した授業の様子

きっかけは「しなの鉄道」

2024年12月24日、この日訪れたのは岡山県の南西部、広島県との県境に位置する井原市立高屋中学校（貝畑和明校長）です。「正しく 仲よく たくましく」を校訓に、全校生徒約145名が元気に学校生活を送っています。

今回参観するのは、川野^{とおる}亨先生による音楽科創作の授業です。「カトカトーンで井原鉄道の列車接近メロディーをつくろう」と題し、プラットフォーム上で使用する“駅メロ”と呼ばれる音楽を、カトカトーンを用いて創作します。

新たな音楽Webアプリケーション
カトカトーン

<https://www.kyogei.co.jp/katokatone/>





慣れた手付きで端末を操作する生徒たち

2024年7月にテレビ朝日「ナニコレ珍百景」で、長野県飯綱町立飯綱中学校の生徒が、同県を走るしなの鉄道牟礼駅の発車メロディーをカトカトーンで創作したという事例が紹介されました。これを知った川野先生が、高屋中学校でも同様の取り組みができないかと地元を走る井原鉄道に打診し、実現に至りました。

カトカトーンを使って

列車接近メロディーをつくる

1、2年生を対象に行われた本実践は、全5～6時間をかけて行われました。まずは「井原市」から思いつくイメージを膨らませ、どんな列車接近メロディーにしたいかを考えます。イメージを固めたところでリズム創作を行い、あらかじめ決められた3パターンのコード進行の中から1つを選んで、そのコードに準じたメロディーをカトカトーンで創作しました。

今回参観したのは2年生の第6時（最終回）です。1人1台のGIGAスクール端末（Chromebook）とヘッドセットを用いて、伴奏のアレンジや、対旋律、装飾音、速度、音色、音量、音域などの最終調整を行います。生徒はカトカトーンのミュートボタンやループボタンを活用して



お披露目の会場となった井原駅

音を確かめたり、友達どうして互いの作品を聴き合ったりしながら、慣れた手付きで作業を進めていきました。

授業中、川野先生が生徒に向けて不要なパートや旋律のリズムなどを減らすよう声掛けされており、その結果、作品発表時に披露された生徒の楽曲も洗練されていたのが印象的でした。授業中の生徒の反応について川野先生に伺うと、「優秀な作品が駅の列車接近メロディーに採用されるということで、生徒たちのやる気をひしひしと感じました。きちんとした曲に仕上げるための指導はなかなか難しかったですが、準備も含め、生徒と楽しみながら授業を進められたのが、自分としてはよかったです」と述べられました。

井原駅で開催されたお披露目会

2025年1月24日、爽やかな冬晴れとなったこの日の夕方、「井原鉄道への楽曲提供記念お披露目会」が行われました。井原鉄道井原線は、岡山県総社駅^{かなべ}から広島県神辺駅までの41.7kmを結ぶ第三セクター鉄道で、お披露目の会場となった井原駅は井原線最大の拠点駅です。今回、井原鉄道の列車接近メロディーに採用された作品は3点あり、これらはプラットホーム上の列車接近放送として、お披露目会後から1年間使用されます。



井原駅長の芝崎直人さん



お披露目の様子（左から今井由紀子教頭先生、渡辺恵衣さん、高村愛彩さん、川合琴音さん、川野亨先生）



井原駅のプラットフォーム上で行われた、新たな列車接近メロディーの鑑賞会。生徒の作品は、井原駅といづえ駅で使用される

「とてもクオリティが高いと思います」と作品を評価したのは、井原駅長の芝崎直人さんです。「列車接近放送の音楽は開業（1999年）当時のものをそのままずっと使っています。かつては開発に苦労もありましたが、今では地元の子どもたちが授業を通してつくってくれる時代になり、ありがたいことです」と感慨深げに述べられました。

6時間目の授業を終えた生徒3名と川野先生、今井由紀子教頭先生が会場に到着すると、地元メディアによる囲み取材を経て、お披露目会が始まりました。芝崎さんの開会挨拶に続く優秀作品の表彰では、賞状、副賞の授与とともに作曲者からの一言を添えた作品発表が行われました。最優秀賞を受賞したのは、渡辺恵衣さん（1年生）の作品です。「井原の伝統的な技術や伝統を、お年寄りから若い世代へとつなげていきたいという思いを込めて作曲しました」とコメントされた作品は、巧みな分散和音が印象的な音楽でした。優秀賞には、井原鉄道

の列車が走っていく姿をイメージしたという高村愛彩さんの作品と、美星町の星をイメージしてつくられた川合琴音さん（共に2年生）の作品が選ばれました。

一連の活動を終えて

閉会の挨拶では今井教頭先生が、「こういう形で地域に貢献できたことは生徒の自信になると思います。このように、学校と地域とが一体になった活動を続けていくことが、ひいては井原市の活性化にもつながるのではないかと思います」と締めくくりました。

式典後は井原駅のプラットフォームに移動し、16時40分着の下り列車の到着に合わせた新たな列車接近メロディーの鑑賞会が行われました。自動音声による案内に続き、生徒のつくった作品がホーム上の旅客へ列車の到着を知らせます。一連の活動を終えて川野先生は、「授業を通して子どもたちの創作の可能性を引き出したこと、そして音楽の授業の垣根を越えて地域とつながれたことに喜びを感じます」と述べられました。

さまざまな場面で活用の幅を広げるカトカトーンが、授業の枠を超えて、生活や社会の中で今後も使われ続けていくことに期待します。

ブーケ編集部



表彰後に笑顔を見せる生徒たち



「井原鉄道への楽曲提供記念お披露目会」の様子をご覧ください。

上野耕平の crossing [クロッシング]

第20回

津軽鉄道のストーブ列車



青森県の津軽五所川原駅と津軽中里駅を結ぶ津軽鉄道。冬の時期の名物として名高いストーブ列車。その名の通り、車内には石炭を燃料とするダルマストーブがある。

使われる車両は昭和20年代に製造された昔懐かしい旧型客車だ。一般的なディーゼル車に牽引される形での運行。ゆったりとしたスピードで、津軽の冬景色を進む。車内ではストーブの上で焼いて食べられるスルメを買うことができる！香ばしく旨みたっぷりのスルメを齧りながら、ダルマストーブにじんわり温められ、旧型客車の軋み音と共にゆったり味わう冬景色。決して他では味わえない時間の進み方。

案内放送の津軽弁の響きに癒されながらあつという間に終点に。帰りは反対側の車窓を見ようかな。



文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×（かける）クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

◇上野耕平コンサート情報はこちら。

<https://uenokohei.com/concert/>

（上野耕平公式サイトより）



編集部メモ

津軽鉄道は、津鉄の愛称で知られる日本最北の私鉄である。
毎年12月1日から翌年3月31日まで運行されているストーブ列車は、乗車券に加えてストーブ列車券を購入することで誰でも乗車することができる。
また、夏のイベントとして、車内を45～50℃まで熱して走る「真夏のストーブ列車」が運行されたこともある。



Contents

- 04 [特別企画/Interview] 藤原道山〜伝統の継承と革新に挑戦し続ける尺八演奏家が語る
- 08 [連載] 日本めぐり 第11回 浅野恭央(株式会社浅野太鼓楽器店)
- 10 [新連載] フォトエッセイ A Finder's Memory | 枚目 川しま ゆうこ
- 12 [特別レポート] カトカトーンで駅メロをつくろう〜井原市立高屋中学校×井原鉄道
- 15 [連載] crossing 第20回 上野耕平

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.22をご清覧いただき、ありがとうございます。

今号の特別企画では、尺八の魅力を伝えるべく、ジャンルやメディアを超えて第一線で活躍する尺八演奏家、藤原道山さんのインタビューをお届けします。

人と人、音と音、さまざまな「出会い」が今の自分をつくっているというお話からは、これまで一つ一つの演奏活動に真摯に向き合われてきた道山さんの音楽人生がうかがえるように感じました。

「日本めぐり」では、和太鼓の製作工程をご紹介します。

株式会社浅野太鼓楽器店が取り組む、太鼓の資源確保と地球環境保全を目的とした植林事業は、200〜300年先を見据えていると言います。

創業400年の歴史を誇る伝統の技を未来へ継承する、その熱意とスケールの大きさを実感する取材となりました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。

Staff

Art Direction & Design: 中澤美羽
本文組版: 松田 剛、嵯峨瑞萌(quia)
写真: 川しま ゆうこ(特別企画/Interview)
DTP: 浅野真理子(マール) / 印刷: 新日本印刷
製本: ヤマナカ製本

